



シンポジウム会場
熱心に耳を傾ける参加者



小豆島石丁場調査概報

小豆島石丁場調査委員会

編集 小豆島石丁場調査団
発行日 二〇二三年二月三日

No.2

小豆島石丁場調査委員会
小豆島石のシンポジウム2023

参加費 無料

「日本遺産の石の島、
新たな発見と保存をめざして！」

大規模な調査で明らかになった石の島の新たな発見と保存をめざして、最新の調査結果や最新の保存技術について、専門家による講演やパネルディスカッションを行います。また、最新の調査結果や最新の保存技術について、専門家による講演やパネルディスカッションを行います。

主催 小豆島石丁場調査委員会 共催 土庄町・小豆島町
後援 徳島県教育委員会・徳島県文化財保護委員会・徳島県立大学

シンポジウム

2023年2月11日(土)
13:30~16:00
土庄町中央公民館
定員 200名程度 (申込不要)

現地研修 (調査体験) ※要申込

2月12日(日)
10:00~14:00
小豆島町御石丁場
定員 20名
御石八丁 (旧御石小学校) グラウンド

第1部 概論

「調査の目的と概要」
文部科学省文化庁立中央調査部調査員 横田 浩
「デジタル技術を活用し、調査から石丁場を調査する」
高野 一 (国立文化財研究所主任研究員)
「電子顕微鏡」
徳島県立大学 工学部 工学系 教授 佐藤 一幸
「石丁場の中核、熱心」
島下真治 (香川県教育委員会主任文化財専門員)

第2部 パネルディスカッション

「日本遺産の石の島、
新たな発見と保存をめざして！」

司会 横田 浩 (徳島県立大学准教授、徳島大学学術顧問)
パネリスト 横田浩 (文部科学省、調査員)、佐藤一幸 (徳島県立大学)、島下真治 (香川県教育委員会)

シンポジウム動画配信
www.shozustone.com
(小豆島石丁場調査委員会HP)

印刷・発行 小豆島町立印刷局 TEL:0879-62-7004 ○小豆島町立印刷局 TEL:0879-62-7021

シンポジウム案内チラシ

二〇二三年二月、「日本遺産の石の島、新たな発見と保存をめざして！」をテーマに、小豆島石丁場調査委員会が主催して、小豆島石のシンポジウム2023が開催された。会場となった土庄町中央公民館には、約一五〇人の参加者が島内だけでなく、岡山・徳島・静岡県からも訪れ、熱心に耳を傾けていた。またオンラインでも同時配信された。

第一部では委員会のこれまでの調査成果が報告された。最初に島の石丁場の概要と日本遺産認定の経緯が説明され、既存石丁場の価値の再確認と新たな石丁場の発見が調査目的と報告された。次いでドローンやサンプを用いた調査方法やデジタル技術を活用しての調査を紹介。

また、小瀬原丁場跡の調査から、新たな刻印と矢穴石の発見経緯が報告され、石丁場の範囲比定には踏査の重要性を強調。一方、調査後の保存をどのように図るかが説明され、島の宝物である石丁場を未来へ繋ぐには多くの島民が関わり活動を継続することを期待する、と締めくくった。



福田地区石丁場の整地作業

福田地区にある二つの石丁場で調査員からの説明を受け、調査が出来るやすい環境作りを行っていく。手に道具を用いて草木を刈取り、地

向かった。

第二日は、現地研修として体験調査が福田石丁場で実施された。島内外からの一九名の参加者が二グループに分かれ、それぞれの石丁場

新たな調査方法により、多くのことが明らかになってきたことが示された。また、報告者だけでなく、調査に携わった島民の思いが語られると、会場の人たちが深くうなずいている姿が印象的であった。

シンポジウムの第二部は、報告者四人がパネリストとなり、パネルディスカッションが行われた。会場からの質問に答えながら、島の石丁場の魅力や、今迄行われてこなかった



パネルディスカッションの様子

中に埋まった石の周辺の土を掘っていく。やがては表れてくる矢穴に一喜一憂しながら、作業を進めていく。瞬く間に周辺は整備され、矢穴の存在がくっきりと浮かび上がってくる。

巨石に刻まれた矢穴の大きさにより、その石が切られた時期が分かる、との説明を受けながら、その時代の様相を彷彿させる丁場跡にたずむ人たちは、強い関心を示したようであった。この矢穴を調査する方法として、拓本の採取があると、その方法の見本を示した。拓本採取を体験しようとする、何人かの人たちが取り組んでいく。初めての体験ながらなかなかうまく採取出来ている。「採取した拓本は記念に持帰って下さい」との提案に、「うれしい、いい記念になる」と喜びながら大切にリユックへ入られていく。

すっきりきれいな現場は、次回の調査でどのような成果が出るだろうか。参加された人



清掃が終了全員で記念写真

福田沖の小豆

翌二四日は

シリコン流し込み矢穴の型取りのためシリコンの流し込みを行う。その後三グループに分かれて山中を踏査、その結果二グループが矢穴石を発見した。後日再調査を実施予定。



シリコン流し込み矢穴の型取り



この拓本私が採取しました

たちに感謝しなければならぬ。わずか数時間の体験であったが、参加者は調査が大変な労苦だと認識したようである。これを機会により多く島の人に関心を持ってもらい、島の石の歴史文化を伝えていって欲しい。

今年度の調査は、第五回調査が四月二三・二四日に、調査員九名と島内協力者・徳島文理大学学生補助員合わせて二二名によって行われた。一日目は二月に発見した重岩南部谷筋で、巨

石をソナーを設置したサップを用いて、空中ドローンとタイアップして調査した。従来は小型船により、海岸線の調査をし



サップと潜水による海中調査

海中の残瀬地区の海岸線の調査を実施した。参加者は調査員七名と協力者・学生補助員五名であった。



矢穴が並んだ小島の石を調査した。島の頂部に巨石がある



突堤の跡か？

全国でも最初であろう。今回は、海岸線の目視調査を重点的に行なったことで、砂浜から沖に向けて一直線に並んでいる石の配列が見つかった。石丁場からの谷筋の直線上に石が並んでいることから、船への石の搬送用の突堤の可能性が高い。結論は今後の詳細な調査の結果を待たねばならないが、大きな

移動も可能となり、それまでは未確認であった場所への移動も可能となり、より一層正確な情報が入手できるようになった。サップを用いての水上・水中調査は、当調査が



海岸の石の測量

成果といえる。また、昨年の調査で見つけた海中に矢穴がある巨石を測定。縦横 $2.2\text{m} \times 1.8\text{m}$ 、高さ 2.2m あり、矢穴数は二個確認した。矢穴の大きさは $10 \times 12\text{cm}$ ほどで、小瀬原石丁場跡のものとはほぼ一致しており、同時期のものに間違いは無からう。

海岸線の調査だけでなく、集落周辺の石材活用状況の調査も行った。その結果、集落内の庵で矢穴石を使用した石碑を確認、千軒地区では古い時期の石塔を発見した。石塔は次回再調査の予定。

第七回調査は、十一月二六・二七日に、調査員七名と協力者・学生補助員六名で実施。一日目は巨石矢穴に流し込んだシリコンの撤去作業を行う。

二日目は重岩西部山間部谷筋をニグループに分かれて踏査。矢穴石を二個発見、その後別の谷筋でも二個発見する。矢穴はいずれも比較的大きいものであった。これらのことから、小



踏査で発見した矢穴石



木々が生い茂る山中を踏査
瀬原丁場が広い範囲にわたって行われている

る。一方、文献に記されながら所在不明な石丁場の存在の確認が求められる。踏査範囲を拡大して行くことにより、ある程度の状況が明らかになる。

第八回調査は、二月一二日のシンポジウム現地研修(体験調査)を充てた。参加された人たちに調査の重要性を知ってもらえたと考える。参加者の協力の下、次回調査の下準備(現地整備)ができたことに感謝したい。

第九回調査は、三月二日に調査員・協力者八名で、第七回調査場所の西谷筋を踏査。近代石丁場の遺構が見られるが、一部石引道が残

り、そこには古い石が散在している。そこに矢穴が残された石を四個確認、中には13×9×9



矢穴の大きさはどうか？

の大きさの矢穴が見られる。また、尾根筋でも二個発見、古い時期の石が確認できる。だが、いずれも整形された石で、原形を留めた石は確認できなかった。

この箇所は、谷筋から海岸部への直線上に石が存在することから、史料に書かれている所在不明な石丁場の可能性を彷彿させる状況といえる。一方、隣の谷筋にも石が散在しており、次回踏査により詳細が明らかになると考える。

調査補助員として参加している徳島文理大学学生たちの声を聞いてみた。

・調査では座学とは異なり、本物を見ながら学べるのでとても身になります。(村瀬龍宇一)
・実際に現地へ足を運ぶことで、様々な調査方法や考え方を学ぶことが出来てとても楽しいです。現地を歩くことが大切だと、この調査を通じて感じる事が出来ました。(出口明澄)
・石の調査は体力を使うハードな内容だが、それと同時に昔の人の軌跡に現代からふれることができるという、他に代えがたい楽しさがあります。(西村祐紀)

調査雑感

調査の度に毎回のよう、マスコミが同行する。そして時にはテレビで、新聞で報道される。それを見た人が、石の調査に関心をもってくれ

ることは嬉しいことだ。

ある新聞に「島の目魚の目 石の島を探る」のテーマで、島在住の二人が紹介された。島の目はドローンで魚の目はサップを指している。それまでは石に関心が無かったが、あるきっかけから関心を示すようになり、「島のために自分のできることをしたい」といって、積極的に調査に参画している。

このように人たちと一緒に調査できることは、励みになる。調査が終えても仲間として友好を深めていきたいと思うこの頃だ。



島の目魚の目による調査

【編集後記】

石を求めての山歩きは決して楽ではない。だが、そこで矢穴があいた石を見つけたときは、その苦しさが吹き飛んでしまう魅力がある。それが調査の楽しみの一つだ、と感じつつ今日も山歩きをしている。さあこんどはどんな石にめぐりあつかないか……。(S記)